

# 小・中学生の友人関係とアイデンティティに関する研究

——全国9都県での質問紙調査の結果より——

比較教育社会学コース 藤 田 英 典  
聖徳学園岐阜教育大学教育学部 伊 藤 茂 樹  
比較教育社会学コース 坂 口 里 佳

The Structure of Peer Relations and Identity of Pupils:

Based on the Questionnaire Survey Data Collected in 9 Prefectures

Hidenori FUJITA / Shigeki ITO / Rica SAKAGUCHI

Our society has been experiencing drastic changes, so-called post-modern changes. These changes influence and reorganize daily experiences of children, peer relations among them, and in turn, their identity and life-world.

This paper examines how identities and life-worlds of school-aged children are organized, focusing on peer relations and based on the nation-wide questionnaire survey of 7144 pupils of elementary and lower secondary level.

The paper is composed of the following five sections: Section 1 presents a brief discussion about our theoretical perspective. Section 2 investigates the foundations and forms of peer relations, and shows the decline of the size of peer groups and the tendency toward the closedness of group relations.

Section 3 investigates the structural characteristics of peer relations, examining daily activities of children, and shows, for example, that the smaller size of peer group, closer friendship, and higher probabilities of psychic stress, friction and conflicts are positively correlated.

Section 4 investigates the relationships between peer relations and identity formation. Here, we distinguish the following four aspects of identity: self-efficacy; attachment/orientation to family as one of the major groups; self-image in relation to others; and self-consciousness through the eyes of others. We found that peer relations have significant linkages with these four aspects of identity. Among many findings, one example is that self-image in relation to others tends to be enhanced by close and good peer relations.

Section 5 discusses the implications of the above findings in relation to on-going post-modern changes, and argues that peer groups are functioning as a defensive mechanism on the one hand and on the other existential space where individuals can relax and secure their existence.

## I 研究の目的と分析課題

小学校高学年から中学校段階にかけて、子どもたちの生活の中心は家庭から学校へと移行する。この移行過程は、アイデンティティの再編をとまなう二次的社会化の

過程であり、学校での人間関係がその基盤として重要になる。本研究は、子どものアイデンティティの再編基盤として学校での友人関係を重視し、小・中学生の友人関係のありようと、そのアイデンティティとの関わりについて実証的に考察することを目的とする。学校での友人関係については、近年、いじめとの関連でその歪みや問

題性が指摘されているが、本研究には、そうした友人関係の歪みや問題性の基盤を明らかにするという意義もある。分析に先立って、分析対象である「友人関係」および「アイデンティティ」の概念内容とその広がりについて述べておく。

一般に子どもの友人関係は、一対一の関係としてよりも、三人以上の集団的関係として展開する傾向があり、それゆえに子どもの「仲間集団 (peer group)」は、固有の構造と機能を備えた準拠集団として、重要な研究対象とされてきた<sup>1)</sup>。論者による違いはあるが、およそ仲間集団とは、遊戯活動を媒介とした同世代・同階層から成る小集団である。その仲間集団については、集団の凝集性や排他性などの性質によって様々な類型化がなされてきたが、その分類基準は必ずしも絶対的なものではない。むしろ、そうした多様な類型化がなされてきたということ自体、「仲間集団」は遊戯活動を媒介として自然発生的に形成されるものだが、集団の構成や規模、形成基盤や活動形態、その規範や凝集性、成員間の関係性などが多様だということを示している<sup>2)</sup>。もちろんこれは仲間集団に限ったことではない。より一般化していえば、友人関係とは、個人の自発的・任意的な選択によって形成されるものであるが、もう一方で、その選択の範囲と契機は、個人の置かれた社会文化的環境によって構造的に制約されており、その形成基盤や活動形態によって関係のありようは異なってくるということである。

今日の小・中学生は、高度に制度化された学校化社会と、その枠組みを浸食して拡大しつつある情報化社会という、編成原理を異にする二つの社会化空間の狭間で生活しており、友人関係もまた、こうした社会文化的環境の中で形成され展開している。小・中学生は生活の主要な部分を学校で過ごしており、それゆえ友人関係のほとんどは、学校のクラスやクラブを基盤として形成されている<sup>3)</sup>。したがって友人関係の構成や境界のあり方、規範や構えといった諸要素は、学校の組織構造や活動様式、評価構造によって制約されている<sup>4)</sup>。例えば、友人関係が同じクラスや学年の中で形成される傾向があるとすれば、それは学校での諸活動がクラスや学年を単位として行われていることと関わっている。また、友人関係の多くが同性であるとすれば、それは思春期の心的傾向にも関わるが、もう一方で学校での交友が授業の合間のおしゃべりや遊戯活動を主としていることに関わっている。

他方、近年の情報化や消費社会化といった社会文化的変容に伴って子どもの生活世界は大きく変貌し、それに対応して友人関係のありようも変化している。ごく一般的な子どもの生活環境として、家にテレビやステレオ、

ファミコンがあるのは当然となり、マンガや雑誌は近所の本屋かコンビニエンスストアでお小遣いで簡単に買えるものとなり、電話が友だちとのコミュニケーションツールとして定着し、ファーストフード店やゲームセンター、カラオケボックスなど子どもだけで利用できる飲食店・娯楽施設が遍在化してきた。こうした生活環境にあって、子どもたちにとっては、友だちとテレビやマンガや音楽の話をしたり、本やマンガやファミコンソフトの貸し借りをしたり、電話で遊びの約束やおしゃべりをしたり、連れだって繁華街に行ったりすることが、ごく当たり前の交遊活動として定着している。こうした活動レベルの変化に応じて、友人の規模や構成、規範や葛藤のありようも異なってくると考えられる。このように小・中学生の友人関係は、一方では高度に制度化された学校化社会の枠組みの中で形成され、もう一方で情報化や消費社会化といった社会文化的変容の影響を受けながら展開している。本研究の第一の課題は、こうした友人関係の構造と特質を実証的に分析・考察することである。

こうした友人関係を基盤として修正・再編され、もう一方で友人関係に対する構えや志向性を左右しているのがアイデンティティである。アイデンティティとは、生まれてからの諸々の経験を通じて形成してきた自己に対する了解の問題、他者や社会との関係における自己の存在意義ないし「居場所」に関わる問題であり<sup>5)</sup>、他者や集団との関係の変化や重層性に応じて本質的に可変的・多元的なものである<sup>6)</sup>。また、他者や社会との関係について自己評価し、了解する一方で、そうした関係を意識し、志向するという側面も持っている<sup>7)</sup>。生活の大半を学校で過ごす小・中学生にとって、そこでの友人関係のなかに自分を如何に位置づけるかという問題は、「居場所」の確保、すなわちアイデンティティの問題として重大である<sup>8)</sup>。もちろん、学校での「居場所」は必ずしも友人関係の中だけに求められるということではない。しかし近年の傾向として、社会の情報化と共に学校的知識の正当性が揺らぎ、教師の権威も低下し、また教育期間の長期化によって将来が見通しにくくなっているとすれば、子どもたちが学校生活において、授業よりも友だちとの交渉に意味を見出しているとしても不思議ではない。後に見るように、今日の小・中学生のアイデンティティは、友人関係のありようと深く関わっているが、その関連は、学校での「居場所」としての友人関係の重要性を示唆している。本研究の第二の課題は、このような友人関係との関連において、小・中学生のアイデンティティについて考察することである。

上記の課題に基づいて、以下では、第一に友人関係の

形成基盤と形態的特質、第二に交遊活動の形態と友人関係の性質との関連、第三に友人関係とアイデンティティとの関わりについて分析・考察し、最後にそうした小・中学生の友人関係のもつ意味について、近年の社会化空間の変容との関わりにおいて考察する。

なお、本研究の分析において使用するデータは、1995年度実施の「小・中学生の生活と意識に関する調査」(研究代表者：藤田英典、以下「1995年調査」と表記)に基づくものである<sup>9)</sup>。サンプル構成は表1、表2に示したとおりである。友人関係のありようには、学校段階や性別による違いはもちろん、地域による違いも多分にあると予想されるが、以下の分析ではとりわけ地域差についてはほとんど議論していない。というのは、こうした違いは主として交遊活動の頻度の差としてあらわれているが、本研究で焦点化している友人関係の構造やアイデンティティとの関連について、その基本構造や傾向に違いをもたらすものではないからである。

(坂口里佳&藤田英典)

表1 サンプル構成(小中別・男女別構成)

(上段：実数 下段：%)			
小学生		中学生	
男子	女子	男子	女子
1,719	1,661	1,927	1,837
50.9	49.1	51.2	48.8

表2 サンプル構成(小中別・地域別構成)

	(実数)								
	秋田	宮城	群馬	東京	静岡	福井	香川	福岡	宮崎
小学生	281	424	464	358	572	285	337	331	328
中学生	432	341	348	443	587	442	400	444	327

## II 友人関係の形成基盤と形態的特質 —友人関係の〈グループ化〉—

### A 友人関係の形成基盤とグループ化傾向について

上述のように、子どもの友人関係は3人以上の集団的關係として展開する傾向があり、集団の構成や規模、流動性といった形態的特質は、その形成基盤によって制約されている。1995年調査の結果より、今日の小・中学生の友人関係は、その形成基盤、および集団化の様式という点で、次のような特徴を持っていることが明らかになった。

第一に、小・中学生の「ふだん仲良くしている友だち<sup>10)</sup>」の約9割が、学校のクラスやクラブを基盤として形成されている。表3に示されているように、「同じクラスが多い」という割合は、小学生で約8割、中学生でも約6割を占めている。このことは、クラス替えの度に友人関係も再編されがちであることを示唆している。

第二に、3人以上の友人グループに所属している子どもが約8割<sup>11)</sup>、中でも3人～5人の小規模なグループに所属している子どもが全体の約5割を占めている。表4に示されているように、友人グループの規模は概して女子の方が小さく、3人～5人の小グループが約6割を占めており、また、グループにはいない子は男子に比べて少ない。

第三に、メンバーの流動性は小さく、したがってグループの境界は明瞭かつ固定的な傾向がある。この傾向は小学生よりも中学生、男子よりも女子の方が強い。

このように、小・中学生の友人関係は学校のクラスやクラブを主要な形成基盤とし、少人数の固定的なグループの中で展開する傾向がある<sup>12)</sup>。しかも多くの場合、その友人グループは、学校にいる間だけでなく放課後や休日に一緒に遊ぶ仲間でもあり<sup>13)</sup>、今日の小・中学生の準

表3 友人グループの構成

	(%)				
	全 体	小学生		中学生	
		男子	女子	男子	女子
同じクラスの人が多い	74.0	84.5	87.9	60.5	66.1
同じクラブの人が多い	35.2	24.5	21.0	47.0	45.1
同性だけである	83.1	77.2	82.0	85.7	86.7
同じ趣味の人が多い	40.6	40.0	34.7	48.7	38.1
メンバーはいつも同じ	65.2	56.4	65.3	61.5	76.7
〃(グループ所属者のみ)	72.0	64.2	71.2	70.0	80.8

注) これらの項目は、「ふだん仲良くしている友だち」が「特にない」者を対象外とした(仲の良い友だちがいる者を対象とした)質問項目である。

表 4 友人グループの有無と規模

	(%)				
	全 体	小学生		中学生	
		男子	女子	男子	女子
2 人	5.8	3.6	9.4	1.7	9.1
3～5 人	49.7	43.0	57.6	39.4	59.6
6～9 人	20.6	21.0	16.1	25.7	18.9
10人以上	6.9	11.9	4.5	8.6	2.7
不定	14.5	17.2	9.9	21.9	8.2
いない	2.5	3.4	2.5	2.7	1.5

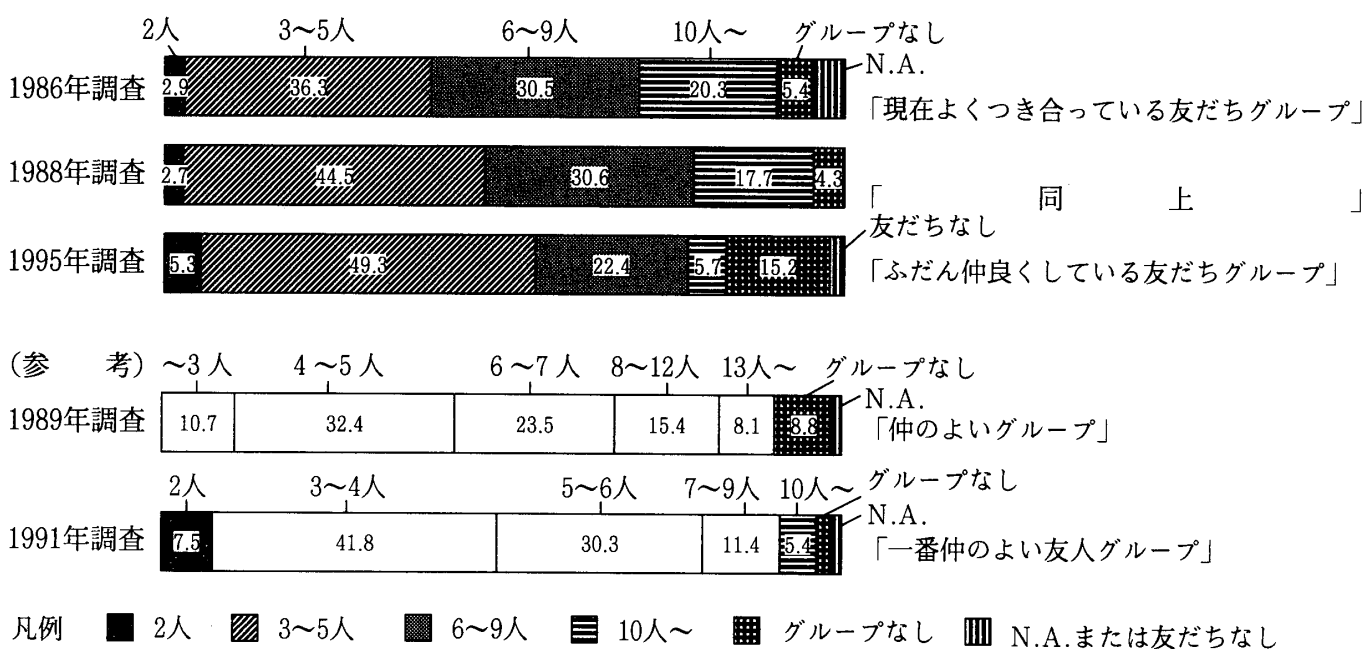


図 1 友人グループの規模の経年比較 (単位: %)

拠集団として重要になっていると考えられる<sup>14)</sup>。

**B 友人グループの小規模化**

以上のように、3人～5人という少人数の友人グループが大半を占めていることは、そこで展開する友人関係のありようを大きく規定していると考えられる。そこで、その考察に先立って、友人グループの規模について既存の調査データと比較検討してみると、ここ10年程の間に友人グループの小規模化が進行してきたらしいことが確認される<sup>15)</sup>。(ただし、我々の調べた範囲では小学生の友人グループについての調査はほとんどなされておらず、友人グループの小規模化傾向が確認されたのは中学生のみである。)

図1は中学生の友人グループの規模の推移を示したものであるが、まず、友人グループの中でも小規模なグルー

プの割合が増加する傾向が確認されよう。3人～5人の小グループの割合は、1986年調査では36%、1988年調査では45%、1995年調査では49%と漸増している。他方、10人以上の大グループの割合は、1986年には20%、1988年には18%、1995年には5.7%と漸減している。1989年および1991年の調査データは選択肢が異なるため厳密な比較は出来ないが、他の調査データが示す小規模化傾向にほぼ沿っていると見てよいだろう。

もう一方で、特定の友人グループをもたない子どもが増えてきたようである。1986年と1988年の調査では、「友人グループはない」という割合は5%前後であるが、1989年では8.8%、1995年の調査では15%となっている。これだけの調査データから断定的なことを言うことはできないが、何らかの理由でグループに入らない、あるいは入れない子どもが増えてきた可能性がある。

こうした傾向には様々な要因が作用していると考えられるが、一つの解釈として、次のような子どもの交遊形態の変化と、それに対応する意識・志向レベルの変化が関わっていると考えられる。第I節でも述べたように、都市化や情報化、消費社会化に伴い子どもの生活世界は大きく変貌してきた。それに応じて子どもの遊戯形態は、例えばテレビを見たりファミコンをしたり、あるいは電話でおしゃべりをしたり、近所の商店街をぶらついたりとといったように、少人数あるいは一人でする遊びが主流を占めるようになってきた。もう一方で、1980年代以降は子どもの数が減少し、近所に住む子どもの人口密度が低下し、子どもたちは学校以外の場では大勢の友だちと

自然につきあう経験が少なくなってきた。よく指摘されている塾や習いごとに通う子どもの増加は、それ自体が子どもの集団的遊びを減少させる一方で、きょうだい数の減少によって生じた家庭の経済的ゆとりと教育的配慮の増大の結果でもあると考えられる。こうした遊戯形態の変化や少子化傾向にともない、子どもたちの友人関係は、雑多で大規模な「活動集団」よりも、同質的で小規模な「交友集団」において展開するようになり<sup>10)</sup>、子どもたちの意識や志向性のレベルでも、少人数の同質的な仲間と遊ぶことが自然で、その方が居心地もよいと感じるようになったとしても不思議ではない。こうした意識・志向性のありようを反映して、友人グループは小規模化

表5 交遊活動状況

交遊形態別・活動項目	全 体	(よくある+ときどきある : %)			
		小学生		中学生	
		男子	女子	男子	女子
〈校外での交遊活動〉					
放課後や休日に一緒に遊ぶ (G)	77.8	78.3	73.1	79.8	75.1
友だちの家に遊びに行く	73.8	82.3	77.3	68.4	60.6
電話で遊びの約束をする	68.9	62.5	72.4	65.3	75.5
土曜休みは友だちと遊ぶ	60.4	62.2	45.2	75.2	56.9
お互いの家を行き来する (G)	54.5	57.3	54.8	56.6	46.4
空き地や公園で遊ぶ	36.2	60.4	47.5	29.9	10.2
電話でおしゃべりをする (G)	44.7	28.6	57.3	29.3	64.0
〈繁華街型交遊活動〉					
近所や商店街をぶらつく	38.0	20.0	26.2	45.7	57.1
ファーストフードの店に行く	31.4	15.2	18.0	33.8	55.9
カラオケボックスに行く	26.2	13.2	21.3	23.4	46.8
ゲームセンターに行く	21.0	22.3	11.4	36.6	11.9
お金の貸し借りをする	16.9	8.3	8.2	27.5	21.8
物の売り買いをする	16.1	10.1	8.5	30.8	13.2
〈ファミコン遊び〉					
ファミコンをする	56.2	79.1	47.3	71.5	27.0
友だちとファミコンをする	48.3	76.8	39.7	64.3	12.7
ファミコンやビデオソフトの貸し借り	34.0	39.7	17.7	49.9	26.6
〈会話活動〉					
テレビやマンガの話 (G)	87.2	84.1	85.8	85.3	93.1
音楽の話 (G)	57.0	22.7	51.9	66.8	82.4
勉強の話 (G)	57.3	43.4	57.7	58.5	68.4
異性や好きな人の話 (G)	51.4	24.8	55.8	46.7	76.5
悩みごとをうちあける (G)	41.5	21.7	56.9	27.6	69.1

注) 交遊活動項目に付した「(G)」は、「ふだん仲良くしている友だち」が「特にない」者を対象外とした(仲の良い友だちがいる者を対象とした)質問項目であることを示す(以下同じ)。

し、もう一方で特定の友人グループに馴染まない子どもも増えてきたのだと考えられる。

ここで検討したのは限られたデータであり、またそれらは厳密な比較を意図して行われた調査データでもない。それゆえ、友人グループの小規模化傾向についてこれ以上の考察はできないが、今日の小・中学生の多くが少人数で固定的な友人グループに所属していることは事実であり、そうしたグループ化傾向は、そこで展開される友人関係のありように深く関わっていると考えられる。次項では、こうしたグループ化状況の下での友人関係のあり方について考察する。

### C グループ化状況での友人関係の特質

表5に示されているように、交遊活動の形態<sup>17)</sup>には学校段階および性別によって大きな違いがある。小学生では「空き地や公園で遊ぶ」「友だちとファミコンをする」といった家の中や近隣地域での交遊活動が中心であるのに対して、中学生では「近所の商店街をぶらつく」「ファーストフードの店に行く」と行った繁華街での交遊活動が多くなる。また、「友だちの家に遊びに行く」「空き地や公園で遊ぶ」といった行動的傾向が男子の特徴であるのに対して、「異性や好きな人の話をする」「悩みごとをうちあける」「電話でおしゃべりをする」といった会話活

動が活発であることが女子の特徴である。

このような交遊形態の違いに応じて、規範や関係性、葛藤のありようも異なるが、上述のように、交遊活動は主として友人グループの中で展開しており、したがって集団の規模や流動性によっても友人関係のありようは大きく左右されると考えられる。表6～表9は、友人関係に関する諸項目の肯定率を、小中・男女別のカテゴリー毎に、友人グループの有無およびグループ規模別に示したものである。これらの表をもとに、グループ化した友人関係の特質として以下の4点が指摘できる。

第一に、グループの規模が大きい方が校外での交遊活動が活発な傾向があり、多くの経験を共有していると考えられる。一般に、交流が活発で多様な活動を共にする集団では、そうした経験の共有を基盤として連帯や信頼関係が形成されると考えられる。小・中学生の場合、概して大グループの方が校外での交遊活動（繁華街型交遊活動の一部を含む）に関する諸項目の肯定率が高く、また「友だちに頼りにされている（以下「被信頼感」と表記）」の割合も高くなっているが、それは多くの経験の共有を基盤として連帯や信頼関係が形成されることを示す一方で、「仲間が多い」ということ自体、「頼りにされている」という自己評価につながっていることを示唆している。

表6 友人グループの有無と規模別・交遊活動状況・小学生男子

	(よくある+ときどきある：%)					
	2人	3～5人	6～9人	10人～	不定	いない
〈校外での交遊活動〉						
放課後や休日に遊ぶ (G)	80.3	77.9	79.0	82.9	75.2	—
友だちの家に行く	83.3	82.6	82.3	86.5	82.7	59.0
電話でアポイント	65.2	61.2	63.0	75.5	59.1	44.0
土曜日に友だちと遊ぶ	64.4	61.2	66.9	64.8	60.1	42.4
お互いの家を行き来 (G)	61.0	57.3	59.1	62.6	50.9	—
空き地や公園で遊ぶ	52.5	59.5	64.3	64.6	61.9	34.5
電話でおしゃべり (G)	43.3	25.0	32.6	37.0	23.9	—
〈繁華街型交遊活動〉						
近所/商店街をぶらつく	18.4	19.2	23.0	17.6	21.7	8.6
ファーストフード	8.5	11.9	21.0	18.5	16.5	10.3
カラオケボックス	12.1	11.8	14.8	21.5	11.3	5.1
ゲームセンター	21.6	20.9	24.5	27.5	22.0	11.9
お金の貸し借り	5.1	8.0	8.3	12.5	5.6	10.2
物の売り買い	20.0	9.2	9.7	14.5	7.6	10.6
〈ファミコン遊び〉						
ファミコンをする	81.9	69.3	76.2	80.6	83.2	67.2
友だちとファミコン	71.3	77.0	75.0	81.6	79.1	58.6
ソフトの貸し借り	37.3	36.0	42.8	46.4	41.1	38.6
〈会話活動〉						
TVやマンガの話 (G)	81.9	82.8	87.8	86.5	81.8	—
音楽の話 (G)	16.7	20.6	25.6	25.9	22.1	—
勉強の話 (G)	39.0	42.5	45.6	50.0	39.0	—
異性や好きな人の話 (G)	20.0	21.6	29.3	27.9	26.0	—
悩みごと (G)	36.6	20.8	24.5	23.9	15.4	—

表7 友人グループの有無と規模別・交遊活動状況・小学生女子

	(よくある+ときどきある：%)					
	2人	3～5人	6～9人	10人～	不定	いない
〈校外での交遊活動〉						
放課後や休日に遊ぶ (G)	68.6	75.0	71.3	80.5	66.8	—
友だちの家に行く	70.3	79.6	78.8	79.5	67.2	36.6
電話でアポイント	69.7	75.4	70.8	75.4	66.7	41.5
土曜日に友だちと遊ぶ	40.6	45.7	44.5	54.1	50.3	22.5
お互いの家を行き来 (G)	54.9	55.9	55.3	48.0	50.6	—
空き地や公園で遊ぶ	44.5	46.6	48.7	54.8	54.0	31.7
電話でおしゃべり (G)	59.0	56.4	59.8	67.5	51.8	—
〈繁華街型交遊活動〉						
近所/商店街をぶらつく	22.1	26.9	29.6	27.1	25.2	7.3
ファーストフード	15.1	18.0	18.6	20.3	21.6	7.5
カラオケボックス	14.2	23.7	22.5	16.3	17.3	12.2
ゲームセンター	7.1	11.8	10.9	12.3	13.8	9.8
お金の貸し借り	5.8	9.0	4.9	14.9	7.4	7.5
物の売り買い	8.4	8.2	9.1	13.6	8.6	4.9
〈ファミコン遊び〉						
ファミコンをする	47.8	46.5	51.2	47.3	47.2	36.6
友だちとファミコン	38.3	41.9	41.6	32.9	32.1	23.0
ソフトの貸し借り	16.2	19.6	16.7	10.9	14.5	12.2
〈会話活動〉						
TVやマンガの話 (G)	87.8	86.3	84.9	83.7	84.1	—
音楽の話 (G)	46.4	52.1	54.9	64.8	45.7	—
勉強の話 (G)	59.1	60.5	54.9	52.7	46.6	—
異性や好きな人の話 (G)	45.8	55.9	62.6	64.8	50.0	—
悩みごと (G)	51.9	46.6	50.2	50.0	37.0	—

表8 友人グループの有無と規模別・交遊活動状況・中学生男子

	(よくある+ときどきある：%)					
	2人	3～5人	6～9人	10人～	不定	いない
〈校外での交遊活動〉						
放課後や休日に遊ぶ (G)	78.2	82.6	87.3	85.9	77.0	—
友だちの家に行く	71.9	75.1	80.9	79.4	73.3	48.0
電話でアポイント	53.1	65.7	71.9	67.3	60.2	39.2
土曜日に友だちと遊ぶ	65.6	74.9	80.8	83.4	71.3	39.2
お互いの家を行き来 (G)	62.5	58.6	61.0	67.3	52.2	—
空き地や公園で遊ぶ	18.8	27.2	32.7	43.1	29.3	17.6
電話でおしゃべり (G)	46.9	27.7	33.9	31.7	24.5	—
〈繁華街型交遊活動〉						
近所/商店街をぶらつく	50.0	43.3	50.4	58.8	42.1	21.5
ファーストフード	32.3	32.0	36.4	48.5	30.2	14.0
カラオケボックス	9.4	21.1	25.8	22.7	23.7	11.8
ゲームセンター	31.3	36.0	37.9	40.6	35.3	35.3
お金の貸し借り	28.1	25.4	29.4	29.2	25.7	18.0
物の売り買い	28.2	28.4	34.7	41.8	27.7	19.6
〈ファミコン遊び〉						
ファミコンをする	68.7	71.4	71.2	72.7	73.0	64.7
友だちとファミコン	65.6	67.2	62.1	66.7	64.2	36.0
ソフトの貸し借り	37.5	48.3	52.5	57.0	51.8	29.4
〈会話活動〉						
TVやマンガの話 (G)	78.1	82.9	86.8	91.6	86.0	—
音楽の話 (G)	34.4	61.8	72.4	77.6	67.5	—
勉強の話 (G)	46.9	59.6	59.4	56.7	37.1	—
異性や好きな人の話 (G)	29.0	44.5	49.8	61.8	42.4	—
悩みごと (G)	37.5	26.3	30.6	34.5	22.9	—

表9 友人グループの有無と規模別・交遊活動状況・中学生女子

	(よくある+ときどきある：%)					
	2人	3～5人	6～9人	10人～	不定	いない
〈校外での交遊活動〉						
放課後や休日に遊ぶ (G)	76.6	75.0	81.3	83.7	73.9	—
友だちの家に行く	54.5	60.9	66.8	66.6	59.0	14.8
電話でアポイント	73.6	75.5	82.1	81.3	70.8	25.9
土曜日に友だちと遊ぶ	45.8	57.2	66.1	71.4	50.7	7.7
お互いの家を行き来 (G)	43.2	46.5	50.5	65.3	44.3	—
空き地や公園で遊ぶ	9.0	9.2	13.7	12.5	11.3	3.7
電話でおしゃべり (G)	65.8	61.3	68.7	83.7	63.7	—
〈繁華街型交遊活動〉						
近所/商店街をぶらつく	55.4	56.5	65.2	48.9	53.7	18.5
ファーストフード	56.1	55.5	60.7	54.2	56.3	18.5
カラオケボックス	44.9	44.8	55.5	66.6	43.7	7.4
ゲームセンター	13.8	11.2	11.6	18.7	13.2	14.8
お金の貸し借り	16.2	22.6	23.7	18.8	19.2	14.8
物の売り買い	13.8	12.5	13.9	22.9	13.4	7.4
〈ファミコン遊び〉						
ファミコンをする	25.8	26.0	30.1	29.1	28.4	22.2
友だちとファミコン	11.4	12.6	13.4	16.7	13.9	7.4
ソフトの貸し借り	20.4	27.0	32.2	16.6	25.1	3.8
〈会話活動〉						
TVやマンガの話 (G)	92.2	92.9	95.1	89.8	92.5	—
音楽の話 (G)	73.0	81.9	87.5	87.7	83.8	—
勉強の話 (G)	66.5	69.5	69.0	57.1	65.1	—
異性や好きな人の話 (G)	69.5	75.2	79.2	93.8	81.2	—
悩みごと (G)	65.8	69.0	70.8	85.7	63.7	—

第二に、とりわけ女子の友人グループは閉鎖化する傾向がある。一般に、秘密を共有する集団は、外部に対して閉鎖性を帯び、内部の人間関係は濃密化する傾向があると考えられる。小・中学生の中でもとりわけ女子の友人グループの方がメンバーの流動性が小さいのは(表3参照)、女子の方が異性や好きな人の話をしたり悩みごとをうちあけたりすることが多く、集団が閉鎖化しやすいことを示唆している。

第三に、グループ規模が小さい方が友人関係の齟齬が多く、この傾向は小学生よりも中学生、男子よりも女子で顕著である。中学生のグループは小学生に比べてメンバーの流動性が小さく境界が明瞭であるが、こうした集団では関係が固定化する傾向があると考えられる。また、女子のグループは上述のように閉鎖化・濃密化する傾向がある。こうした固定性や濃密性、閉鎖性といった特質は、その関係に軋轢や葛藤の契機を胚胎しており、それは集団の規模が小さいほど顕在化・深刻化しやすくなると考えられる。

第四に、グループに入っていない子や特定の友だちがいない子は、友人関係における疎外や齟齬の経験が多く、この傾向はグループの流動性が小さくなる中学生の方が顕著である。また、男子の場合は2人のグループも同様の経験が多く、3人以上のグループが大半を占める中で

周辺的な位置におかれていると考えられる<sup>18)</sup>。

以上、今日の小・中学生の友人関係の特徴としてグループ化傾向を確認し、そのグループ化した友人関係の特徴について、友人グループの有無およびグループ規模を指標として検討してきた。次節ではさらに、様々な交遊形態が友人関係における規範や構え、葛藤のありようなどのような関連をもっているかを探ることにより、小・中学生の友人関係の構造について考察する。

(坂口里佳&藤田英典)

### III 友人関係の構造的特質

#### —交遊活動と関係性との関連構造—

##### A 友人関係の分析枠組み

表10は友人関係の性質に関する諸項目の肯定率を示したものである。まずは主要な特徴を確認しておこう。第1に、小・中学生にとって「友だちとの約束を守ること」は重要な行動規範になっており、友人集団が拘束的な準拠集団になっているということが示唆される。第2に、程度の差こそあれ「友だち関係で嫌なことがある(以下「嫌なこと」と表記)」という子どもが4割、「けんかや仲間割れをする(「けんか」)」「グループを変わりたいと思う(「脱G気分」)」も相当数いることから、友人関係



表10 友だちとの関係性

	(肯定率：%)				
	全体	小学生		中学生	
		男子	女子	男子	女子
友だちとの約束を破るのは悪い	94.5	91.7	96.6	92.7	97.1
友だちとの約束を破ることがある	11.2	14.6	8.8	14.3	6.7
友だち関係で嫌なことがある	43.3	37.5	49.6	35.6	51.3
けんかや仲間割れをする (G)	27.3	28.4	30.4	21.9	29.3
グループを変わりたいと思う (G)	10.9	11.4	14.4	7.4	11.1
友だちに頼りにされている	48.9	43.0	52.7	43.8	56.4

が対立や葛藤の契機、あるいは不安や緊張要因をはらんでいることが示唆される。第3に、「友だちに頼りにされている」と感じている子どもは約半数に達しているが、特定の友人グループに属している子どもが大半を占めてはいることを考えるなら、この結果は、その友人関係が必ずしもすべての子どもにとって「被信頼感」の基盤となるようなものではないということを示している。

こうした友人関係における規範や関係性や葛藤のありようは、交遊形態に対応して形成され、また交遊活動は、個人や集団の友人関係に対する構えや意味づけに対応して展開している。言い換えれば、友人関係は、規範・行動・志向・意味づけなどの諸次元で構造化している。この節では、小中学生の様々な交遊形態が、規範や関係性の次元でどのような特徴をもっているのかを検討し、友人関係の構造的特質について考察する。

友人関係における規範や関係性の指標としては、表10に挙げた6項目を使用する。「友だちとの約束を破ることは悪いと思う (以下「約束規範」と表記)」「友だちとの約束を破ることがある (「約束違反」)」は、友人関係における規範や協調性の水準を示す指標として、「嫌なこと」「けんか」「脱G気分」は友人関係の齟齬や負の意味づけの指標として、そして「被信頼感」は連帯や信頼

表11 友だちとの関係性に関する項目間の関連

(相関係数)					
	約束規範	約束違反	嫌なこと	けんか	脱G気分
約束規範					
約束違反	-.212				
嫌なこと	-.060	.240			
けんか	-.046	.200	.282		
脱G気分	-.076	.115	.265	.270	
被信頼感	.048	-.123	-.055	**	-.054

注) 表中の「\*\*」は、5%水準で相関が見られなかったことを示す。

関係の水準の指標として使用する。なお、友人関係の齟齬に関わる3つの項目は、表11の相関計数値にも示されているように、他の3項目に比べれば相互の関連は強いが、相関値自体はそれ程大きいものではない。このことは、これらの3項目がそれぞれ固有の意味内容をもっていることを示している。以下、これらの6項目と交遊形態との関係について考察する。

## B 交遊形態と関係性との関連構造

表12～表16は、友人関係における規範や関係性と様々な交遊形態との関係を相関係数で示したものである。個々の数値は必ずしも大きなものではないが、交遊形態によって規範や関係性にさまざまな違いがあることが示唆されている。それらの相関値の大きさを比較検討することにより、小・中学生の友人関係を特徴づけている傾向として、とくに次の4点を指摘することができる。

第一に、多くの交遊活動を共にすることによって、連帯や信頼関係が形成される傾向があり、その傾向は中学生の方が強いが、それは次のような理由によると考えられる。子どもたちは、学校や家庭での教師や親との関係において、「児童」「生徒」「(親に対する)子ども」としての役割行動をとっている。しかしもう一方で、そうした大人の教育的視線や役割期待から離れて、同世代の仲間との間に固有の相互交渉空間を形成している。放課後や休日の空き地や公園あるいは繁華街、自分や友だちの部屋は、親や教師の視線から解放された子どもたちだけの相互交渉の舞台である。そこで仲間との対等な協力関係や一種の共犯関係、あるいは共同体的な居心地の良さを経験し、そうした経験の共有を基盤として連帯感や信頼関係が育まれると考えられる。また、校外での交遊活動と「被信頼感」との相関は中学生の方が大きい、それは親や教師に対する反抗的態度の強まりと軌を一にして<sup>19)</sup>、仲間との相互交渉の重要性が高まることを示唆している。

表12 交遊形態と友人関係の性質・全体

	(相関係数)					
	約束規範	約束違反	嫌なこと	けんか	脱G気分	被信頼感
〈校外での交遊活動〉						
放課後や休日遊ぶ (G)	.063	**	-.024	.089	-.070	.136
友だちの家に行く	**	.055	**	.051	-.038	.078
電話でアポイント	.054	**	.060	.102	**	.125
土曜日に友だちと遊ぶ	**	.024	-.077	**	-.048	.087
お互いの家を行き来 (G)	**	.030	**	.129	-.032	.118
空き地や公園で遊ぶ	**	.059	-.027	.060	**	.063
電話でおしゃべり (G)	.040	**	.095	.157	.031	.145
〈繁華街型交遊活動〉						
近所/商店街をぶらつく	.033	.070	.105	.139	.026	.109
ファーストフード	.053	.026	.099	.093	**	.123
カラオケボックス	.029	**	.078	.086	**	.129
ゲームセンター	-.075	.148	.039	.078	.024	**
お金の貸し借り	**	.152	.106	.139	.041	.034
物の売り買い	-.027	.136	.058	.092	.029	.029
〈ファミコン遊び〉						
ファミコンをする	-.095	.134	-.039	**	**	-.068
友だちとファミコン	-.095	.147	-.042	**	**	-.041
ソフトの貸し借り	-.054	.136	.036	.064	**	**
〈会話活動〉						
TVやマンガの話 (G)	**	**	.070	.099	**	.084
音楽の話 (G)	.081	**	.085	.090	**	.141
勉強の話 (G)	.056	**	.100	.129	.043	.094
異性或好きな人の話 (G)	.076	-.025	.151	.197	.028	.200
悩みごと (G)	.091	-.046	.140	.174	**	.239

注) 表中の「\*\*」は、5%水準で相関が見られなかったことを示す。(以下同様)

表13 交遊形態と友人関係の性質・小学生男子

	(相関係数)					
	約束規範	約束違反	嫌なこと	けんか	脱G気分	被信頼感
〈校外での交遊活動〉						
放課後や休日遊ぶ (G)	.065	**	**	.079	-.050	.122
友だちの家に行く	**	**	**	**	**	.061
電話でアポイント	**	.063	.108	.080	**	.105
土曜日に友だちと遊ぶ	**	**	**	**	-.051	.062
お互いの家を行き来 (G)	**	**	.100	.134	**	.142
空き地や公園で遊ぶ	**	**	**	.050	.053	.121
電話でおしゃべり (G)	**	.127	.082	.133	**	.080
〈繁華街型交遊活動〉						
近所/商店街をぶらつく	-.056	.154	.114	.133	**	.106
ファーストフード	**	.124	.113	.099	**	.094
カラオケボックス	**	.082	.072	.092	**	.125
ゲームセンター	-.120	.142	.109	.115	**	.065
お金の貸し借り	-.106	.161	.118	.147	.067	**
物の売り買い	-.075	.196	.118	.111	.061	.080
〈ファミコン遊び〉						
ファミコンをする	-.082	.125	**	.057	**	**
友だちとファミコン	-.062	.104	.061	.056	**	**
ソフトの貸し借り	-.056	.153	.114	.112	**	**
〈会話活動〉						
TVやマンガの話 (G)	**	**	.107	.143	**	.083
音楽の話 (G)	**	.056	.057	.128	.086	.138
勉強の話 (G)	**	**	**	.165	.058	.099
異性或好きな人の話 (G)	**	.088	.142	.187	.111	.172
悩みごと (G)	**	**	.151	.192	.098	.182

表14 交遊形態と友人関係の性質・小学生女子

	(相関係数)					
	約束規範	約束違反	嫌なこと	けんか	脱G気分	被信頼感
〈校外での交遊活動〉						
放課後や休日に遊ぶ (G)	.057	**	**	.087	**	.122
友だちの家に行く	**	.092	**	.078	**	.085
電話でアポイント	**	.067	.050	.090	**	.083
土曜日に友だちと遊ぶ	**	.052	**	**	**	.068
お互いの家を行き来 (G)	**	**	**	.132	**	.089
空き地や公園で遊ぶ	**	**	**	.082	-.054	.090
電話でおしゃべり (G)	**	.125	.054	.163	**	.085
〈繁華街型交遊活動〉						
近所/商店街をぶらつく	-.051	.191	.139	.165	.056	.093
ファーストフード	**	.140	.121	.121	.066	.108
カラオケボックス	**	.076	.052	.077	**	.082
ゲームセンター	-.077	.118	.091	.080	**	**
お金の貸し借り	-.070	.160	.155	.185	-.062	**
物の売り買い	-.050	.086	**	.051	**	**
〈ファミコン遊び〉						
ファミコンをする	**	.087	**	**	**	**
友だちとファミコン	**	.100	.058	**	**	**
ソフトの貸し借り	-.072	.125	.140	.126	**	**
〈会話活動〉						
TVやマンガの話 (G)	**	.070	.107	.087	**	.081
音楽の話 (G)	**	.077	.120	.101	**	.122
勉強の話 (G)	**	**	.092	.133	.056	.054
異性や好きな人の話 (G)	**	.068	.159	.224	**	.136
悩みごと (G)	**	**	.135	.153	**	.166

表15 交遊形態と友人関係の性質・中学生男子

	(相関係数)					
	約束規範	約束違反	嫌なこと	けんか	脱G気分	被信頼感
〈校外での交遊活動〉						
放課後や休日に遊ぶ (G)	.117	**	**	.087	-.087	.167
友だちの家に行く	.075	**	**	.047	-.063	.115
電話でアポイント	.098	**	**	.096	**	.134
土曜日に友だちと遊ぶ	.074	-.046	-.065	**	-.057	.146
お互いの家を行き来 (G)	.090	**	**	.127	**	.134
空き地や公園で遊ぶ	.073	**	**	.054	**	.125
電話でおしゃべり (G)	**	.055	.072	.145	.089	.112
〈繁華街型交遊活動〉						
近所/商店街をぶらつく	**	.081	.085	.163	**	.099
ファーストフード	**	**	.091	.128	**	.117
カラオケボックス	**	**	**	.087	**	.111
ゲームセンター	**	.102	.079	.126	.068	**
お金の貸し借り	**	.150	.118	.177	.054	.067
物の売り買い	**	.111	.117	.190	.051	.050
〈ファミコン遊び〉						
ファミコンをする	**	**	.050	**	**	**
友だちとファミコン	**	.063	.055	**	-.051	**
ソフトの貸し借り	**	.078	.064	.068	**	.059
〈会話活動〉						
TVやマンガの話 (G)	**	**	**	.087	**	.055
音楽の話 (G)	.084	**	.046	.127	**	.116
勉強の話 (G)	**	**	.066	.133	.048	.068
異性や好きな人の話 (G)	.112	**	.084	.233	.047	.205
悩みごと (G)	.101	**	.049	.198	**	.252

表16 交遊形態と友人関係の性質・中学生女子

	(相関係数)					
	約束規範	約束違反	嫌なこと	けんか	脱G気分	被信頼感
〈校外での交遊活動〉						
放課後や休日に遊ぶ (G)	**	**	**	.127	-.092	.184
友だちの家に行く	**	**	**	.076	-.071	.142
電話でアポイント	.064	**	**	.128	**	.130
土曜日に友だちと遊ぶ	**	**	-.094	.046	-.061	.168
お互いの家を行き来 (G)	**	**	-.050	.147	-.065	.147
空き地や公園で遊ぶ	**	.090	**	.104	**	**
電話でおしゃべり (G)	**	**	**	.158	**	.182
〈繁華街型交遊活動〉						
近所/商店街をぶらつく	.047	**	**	.142	**	.100
ファーストフード	.065	**	**	.061	**	.130
カラオケボックス	**	**	**	.080	**	.119
ゲームセンター	-.053	.120	.044	.077	**	**
お金の貸し借り	**	.188	.085	.131	**	**
物の売り買い	**	.113	.068	.086	.059	**
〈ファミコン遊び〉						
ファミコンをする	-.075	.060	**	**	**	-.054
友だちとファミコン	-.046	.072	**	.052	**	**
ソフトの貸し借り	**	.076	**	**	**	.080
〈会話活動〉						
TVやマンガの話 (G)	**	**	**	.055	**	.069
音楽の話 (G)	**	**	**	.049	-.048	.128
勉強の話 (G)	**	**	.122	.081	**	.093
異性や好きな人の話 (G)	**	**	.059	.179	-.056	.195
悩みごと (G)	**	**	**	.153	-.122	.258

第二に、友人関係に金銭が介在すると、葛藤や対立が生じやすくなる傾向がある。一般に、金銭のやりとりには利害関係が伴っており、それゆえ葛藤や対立の生じる可能性が胚胎していると言えるが、それは小・中学生の場合にも当てはまるようである。すなわち、「お金の貸し借り」「物の売り買い」や、そうした行動と親近性のある「繁華街型交遊活動」が、「けんか」「嫌なこと」「約束違反」と相関していることから示唆されるように、この種の行動は友人関係に齟齬や葛藤をもたらし、協調性を疎外する傾向を孕んでいると考えられる。

第三に、「ファミコン遊び」は、「約束規範」とは負の相関、「約束違反」とは正の相関を有するのに対し、「けんか」や「嫌なこと」とはほとんど関連がない。これは「ファミコン遊び」が一人でもできる遊びであり、必ずしも協調性や共同性を特徴としない交遊関係であることによると考えられる。

第四に、秘密の話をすることは、友人関係に対して両義的な性質をもつ。一般に、秘密の話は相手との信頼関係を前提として交わされるものであり、秘密をうちあけることが「信頼関係の証」という意味を持つことも多い。しかしもう一方で、秘密を口外しないと言う強い規範が要求され、またお互いが平等に秘密をうちあけることが

期待される傾向があり、それゆえ常に相手の裏切りや不誠実に対する不安がつきまとうと考えられる。「異性の話」や「悩みごと」と「被信頼感」との相関は、そうした親密なコミュニケーションが、小・中学生にとっても「信頼関係の証」として重要な交遊活動の一つであることを示唆している。しかしもう一方で、それは「けんか」や「嫌なこと」とも正の相関関係にあり、規範や平等性への要求を伴う自己開示的コミュニケーションとして、友人関係に潜在的な不安や葛藤の契機を持ち込む可能性が示唆されている。また前節で述べたように、秘密の話は友人グループ内で共有されることが多く、それゆえ友人グループは閉鎖化し、人間関係が濃密化する傾向があるが、こうした友人グループにおいては、自己開示的コミュニケーションに潜在する不安定要因も顕在化しやすくなると考えられる。

以上のように、小・中学生の友人関係においては、その交遊形態に応じて規範や協調性が要請され、葛藤の契機や不安定要因が持ち込まれ、また連帯や信頼関係が育まれている。こうした構造的性質を持つ友人関係が、友人グループの中で展開しているがゆえに、葛藤や不安は顕在化しやすく、他方、連帯や信頼関係の範囲はグループ内に限定される傾向があると考えられる。次章では、

表17 アイデンティティに関する項目の肯定率

	(%)				
	全体	小学生		中学生	
		男子	女子	男子	女子
自分には良いところがある	58.4	62.3	57.9	56.6	57.3
何でもやる気になればできる	74.0	74.0	77.3	71.3	73.8
親を困らせないようにする	57.3	59.6	63.5	53.2	54.0
家族や親戚に誇りに思う人がいる	48.7	46.8	56.1	42.5	50.4
よその人に感謝されることがある	48.3	44.0	54.8	42.5	52.7
友だちに頼りにされている	48.9	43.0	52.7	43.8	56.4
自分の短所が気になる	65.5	52.7	64.4	63.6	80.1
服装や髪型に気を使う	62.9	36.0	74.5	57.7	82.6

このような小・中学生の友人関係がアイデンティティとどのように関わっているのかを考察する。

(坂口里佳&伊藤茂樹)

#### IV 友人関係とアイデンティティ

##### A アイデンティティの分析枠組み

はじめに述べたように、アイデンティティとは、自己の存在や固有性についての了解の問題であり、他者や社会との関係における自己の存在意義・「居場所」に関わる問題である。そのありようは、個々人をとりまく他者や集団との関係を含めた生活世界のありように根ざしており、また生活世界の変化に応じて常に修正されていくものである。小学校高学年から中学校にかけては、こうした意味ある他者や集団との関係が大きく変わる時期であり、とりわけ主要な「生活の場」である学校において友人関係を形成・維持することは、自分の「居場所」の確保のために切実な課題となる。その意味で友人関係のありようは、アイデンティティの再編基盤であると同時に、アイデンティティの表出態であり、対立・葛藤・承認のアリーナでもある。したがって、子どもの友人関係のありようを理解しようとするとき、アイデンティティの問題は避けて通れない重要な考察課題と言える。

この章では、ここまで検討してきたような友人関係のありようが、子どもたちのアイデンティティにとってどのような関連と意味を持つのかについて考察する。アイデンティティ概念及びその指標化については、エリクソン以来、多様な議論と捉え方があるが、ここでは次の四つの側面を持つものとして考察する。

第一は、自尊心や自信の側面で、ここでは「肯定的自己評価」と呼ぶ。これは「自分には良いところがあると思う」「何でもやる気になればできる」の2項目を合成

したものである。第二は、基礎的な帰属集団への構えに関する側面である。小・中学生の場合、とくに家族が基礎的な帰属集団として重要だと考え、ここでは「親を困らせないようにする」「家族や親戚に誇りに思う人がいる」の2項目を合成したものを指標とし、これを「家族意識」と呼ぶ。第三は、他者との関係についての自己評価に関する側面で、これを「関係的自己評価」と呼ぶ。ここでは「よその人に感謝されることがある」「友だちに頼りにされている」の2項目を合成したものを指標として用いる。第四は、他者からの評価やまなざしに対する意識・志向性に関する側面で、これを「まなざし意識」と呼ぶ。ここでは「自分の短所が気になる」「服装や髪型に気を使う」の2項目を合成したものを指標として用いる<sup>20)</sup>。以下、これら4つの指標と、交遊形態および友人関係における規範や関係性との関連について考察する。

##### B 友人関係と「関係的自己評価」との関わりについて

表18～22は、アイデンティティの構成要素と、交遊形態および友人関係における規範や関係性との関わりを相関係数によって示したものである。これらの表から明らかのように、友人関係は「関係的自己評価」と「まなざし意識」という2つの側面でアイデンティティと比較的大きな相関を持っている<sup>21)</sup>。そこで以下では、これら2つの要素に焦点化して、友人関係とアイデンティティとの関連について考察する。

「関係的自己評価」と友人関係の間には、次の3つの側面で重要な関連がある。

第一に、協調行動の側面が大きい交遊活動の経験（ここでは校外での交遊活動や友だちとのおしゃべりが含まれる）は、他者との関係における自己評価の基盤となり、またそうした自己評価を持つことが、他者との協調行動

表18 アイデンティティと友人関係・全体

	肯定的自己 評価	家族意識	関係的自己 評価	(相関係数) まなざし 意識
〈校外での交遊活動〉				
放課後や休日に遊ぶ (G)	.093	.046	.129	.068
友だちの家に行く	.076	.025	.086	* *
電話でアポイント	.080	.040	.140	.172
土曜日に友だちと遊ぶ	.038	* *	.069	* *
お互いの家を行き来 (G)	.070	.059	.122	.070
空き地や公園で遊ぶ	.113	.091	.090	-.098
電話でおしゃべり (G)	.050	.058	.167	.210
〈繁華街型交遊活動〉				
近所/商店街をぶらつく	* *	-.052	.102	.229
ファーストフード	.039	-.028	.126	.244
カラオケボックス	.049	* *	.135	.247
ゲームセンター	* *	-.089	* *	* *
お金の貸し借り	* *	-.085	.028	.144
物の売り買い	* *	-.069	* *	.068
〈ファミコン遊び〉				
ファミコンをする	* *	-.077	-.080	-.181
友だちとファミコン	* *	-.041	-.049	-.193
ソフトの貸し借り	* *	-.057	* *	* *
〈会話活動〉				
TVやマンガの話 (G)	.051	.031	.089	.138
音楽の話 (G)	.064	.043	.153	.313
勉強の話 (G)	.089	.122	.123	.174
異性や好きな人の話 (G)	.126	.080	.218	.382
悩みごと (G)	.123	.149	.264	.342
〈友人関係の性質〉				
約束規範	.053	.077	.058	.102
約束違反	-.097	-.092	-.126	-.049
嫌なこと	-.025	-.024	-.020	.183
けんか (G)	.093	* *	.129	.097
脱G気分 (G)	-.031	* *	-.031	* *

注) 表中の「\* \*」は、5%水準で相関が見られなかったことを示す。(以下同様)

に対する肯定的な構えにつながると考えられる。前節で検討したように、多くの経験を共有することは、仲間との間に連帯や信頼関係を育む基盤となっている。小・中学生にとって、身近で重要な他者である友だちとの間に良好な関係を築いていること、そこに自分の居場所を確保しているということは、他者との関係についての自信や他者への肯定的構えの形成に関わる経験として重要な意味を持つと考えられる。

第二に、友だちとの親密なコミュニケーションは、他者に受容・信頼されているという自己イメージや自信の基盤であり、またそうした自己イメージや自信を持つことが、他者とのコミュニケーションに対する積極的な構えにつながると考えられる。前節で検討したように、親密なコミュニケーションは友人関係に対して両義的な性質をもつが、そのうちの「信頼関係の証」という肯定的側面は、小・中学生の「関係的自己評価」の形成・維持

表19 アイデンティティと友人関係・小学生男子

	(相関係数)			
	肯定的自己 評価	家族意識	関係的自己 評価	まなざし 意識
〈校外での交遊活動〉				
放課後や休日に遊ぶ (G)	.095	.057	.127	**
友だちの家に行く	**	**	**	**
電話でアポイント	.087	**	.068	**
土曜日に友だちと遊ぶ	.080	.055	.117	.072
お互いの家を行き来 (G)	.098	.102	.154	.127
空き地や公園で遊ぶ	.134	.120	.163	.053
電話でおしゃべり (G)	.084	.052	.118	.115
〈繁華街型交遊活動〉				
近所／商店街をぶらつく	**	**	.127	.134
ファーストフード	.053	.055	.120	.099
カラオケボックス	.140	.084	.138	.171
ゲームセンター	**	**	.052	.127
お金の貸し借り	**	**	**	.117
物の売り買い	.052	**	.071	.100
〈ファミコン遊び〉				
ファミコンをする	**	-.060	**	**
友だちとファミコン	**	**	**	**
ソフトの貸し借り	**	**	**	.096
〈会話活動〉				
TVやマンガの話 (G)	.078	.062	.082	.078
音楽の話 (G)	.122	.131	.176	.227
勉強の話 (G)	.083	.142	.105	.076
異性や好きな人の話 (G)	.167	.139	.188	.184
悩みごと (G)	.138	.171	.217	.155
〈友人関係の性質〉				
約束規範	**	.098	**	**
約束違反	-.081	-.067	-.065	**
嫌なこと	.056	**	**	.177
けんか (G)	**	**	**	.155
脱G気分 (G)	**	**	**	.089

にとってとりわけ重要な意味をもっていると考えられる。

第三に、交遊活動を基盤として再編された「関係的自己評価」は、ひるがえって規範水準や他者との協調行動に対する構えを左右する。「関係的自己評価」と「約束違反」との負の相関関係は、このようなアイデンティティと友人関係の循環的關係を示唆していると考えられる。

C 友人関係と「まなざし意識」との関わりについて  
前項で検討した「関係的自己評価」が、「他者から評

価・承認されている」という自己評価的意識であるのに対して、他者からの評価や視線に対する意識や関心ないし志向性を、ここでは「まなざし意識」と呼んでいる。この合成変数を構成する2項目が「服装や髪型に気を使う(以下「外見」と表記)」と「自分の短所が気になる(「短所」)」であることにも示されているように、「まなざし意識」には、他者の評価やまなざしを意識して自己を表出しようとする側面と、他者の評価やまなざしを意識して自己の内省に向かう側面がある。したがって、

表20 アイデンティティと友人関係・小学生女子

	肯定的自己 評価	家族意識	関係的自己 評価	(相関係数) まなざし 意識
〈校外での交遊活動〉				
放課後や休日に遊ぶ (G)	.076	.087	.128	.114
友だちの家に行く	.069	**	.108	.102
電話でアポイント	.070	**	.093	.174
土曜日に友だちと遊ぶ	**	**	.078	**
お互いの家を行き来 (G)	**	.069	.091	.069
空き地や公園で遊ぶ	.104	.092	.130	.050
電話でおしゃべり (G)	**	**	.088	.070
〈繁華街型交遊活動〉				
近所/商店街をぶらつく	**	**	.059	.135
ファーストフード	**	**	.097	.104
カラオケボックス	**	**	.088	.119
ゲームセンター	-.062	**	**	**
お金の貸し借り	**	**	**	.116
物の売り買い	**	**	**	**
〈ファミコン遊び〉				
ファミコンをする	**	**	**	**
友だちとファミコン	**	**	**	**
ソフトの貸し借り	**	**	**	.062
〈会話活動〉				
TVやマンガの話 (G)	**	**	.090	.177
音楽の話 (G)	.083	.061	.115	.205
勉強の話 (G)	.107	.123	.102	.134
異性や好きな人の話 (G)	.137	.099	.165	.304
悩みごと (G)	.138	.133	.201	.238
〈友人関係の性質〉				
約束規範	.070	.079	.063	.053
約束違反	-.135	-.128	-.104	**
嫌なこと	**	-.054	**	.210
けんか (G)	**	**	**	.080
脱G気分 (G)	**	**	**	**

「まなざし意識」と友人関係との関連を検討することは、小・中学生がどのような場面で他者のまなざしや評価を意識し、どのような契機で自己表出あるいは内省に向かうのかを探ることになる。

表に示されているように、「まなざし意識」は、さまざまな交遊活動のうち、繁華街型交遊活動（とくにファーストフードの店やカラオケボックスに行くといった活動）、および会話活動（とくに「異性の話」や「悩みごと」）との相関が高く、友人関係の性質では「嫌なこと」との

相関が比較的高い。上述のように「まなざし意識」は二つの側面を持っているが、繁華街型交遊活動はその二側面のうち、「外見」との相関が強いのに対して、会話活動および「嫌なこと」は、「外見」および「短所」の両側面と比較的高い相関をもつ。これらの結果を踏まえて、友人関係と「まなざし意識」について、次の3点を指摘することができる。

第一に、消費・都市空間を舞台とする交遊活動において、匿名的な他者のまなざしが意識される傾向がある。



表21 アイデンティティと友人関係・中学生男子

	(相関係数)			
	肯定的自己 評価	家族意識	関係的自己 評価	まなざし 意識
〈校外での交遊活動〉				
放課後や休日に遊ぶ (G)	.129	.055	.147	.120
友だちの家に行く	.064	**	.116	.082
電話でアポイント	.113	**	.147	.150
土曜日に友だちと遊ぶ	.082	**	.110	.090
お互いの家を行き来 (G)	.081	.050	.142	.116
空き地や公園で遊ぶ	.096	.068	.132	**
電話でおしゃべり (G)	.071	.071	.134	.116
〈繁華街型交遊活動〉				
近所／商店街をぶらつく	.053	-.051	.087	.152
ファーストフード	.091	**	.116	.200
カラオケボックス	.077	**	.120	.188
ゲームセンター	**	-.085	**	.101
お金の貸し借り	**	-.059	.070	.126
物の売り買い	**	-.046	.054	.139
〈ファミコン遊び〉				
ファミコンをする	-.045	-.077	**	**
友だちとファミコン	**	**	**	**
ソフトの貸し借り	**	**	.067	.086
〈会話活動〉				
TVやマンガの話 (G)	.085	.049	.057	.049
音楽の話 (G)	.134	**	.128	.232
勉強の話 (G)	.103	.144	.081	.118
異性或好きな人の話 (G)	.193	.095	.228	.286
悩みごと (G)	.149	.176	.270	.230
〈友人関係の性質〉				
約束規範	.067	.078	.055	.089
約束違反	-.079	-.060	-.119	**
嫌なこと	**	**	-.048	.131
けんか (G)	**	**	**	.111
脱G気分 (G)	**	**	-.060	**

消費・都市空間では、その場にふさわしい服装や行動、態度についてのイメージが、そこに集まる人々の間に共有されており、人々はその見知らぬ匿名的な他者のまなざしを多少なりとも意識して行動したり、自己を演出したりする傾向がある<sup>23)</sup>。今日では、子どもや若者向けの娯楽施設、子どもだけでも利用しやすい飲食店等が至る所にあり、こうした施設や店のある繁華街が小・中学生の遊び場の一つとなっている。「繁華街型交遊活動」と「まなざし意識」との相関は、小・中学生もまた消費・

都市空間において匿名的な他者のまなざしを意識して行動しており、また服装や行動によって個性を表出しようとする傾向があることを示唆している。同時に、次の第二の論点とも関わるが、繁華街型交遊活動を共にし、匿名的な他者のまなざしへの志向を共有する友だちによって、自己の行動や個性がまなざされ、評価されていると感じる傾向があることを示唆している。

第二に、親密な友人関係において他者の評価・まなざしを強く意識する傾向がある。親密で自己開示的なコミュ

表22 アイデンティティと友人関係・中学生女子

	肯定的自己 評価	家族意識	关系的自己 評価	(相関係数) まなざし 意識
〈校外での交遊活動〉				
放課後や休日に遊ぶ (G)	.074	**	.170	.126
友だちの家に行く	.060	**	.147	.101
電話でアポイント	.067	**	.148	.174
土曜日に友だちと遊ぶ	.062	**	.152	.118
お互いの家を行き来 (G)	.058	**	.145	.110
空き地や公園で遊ぶ	.074	.047	.076	**
電話でおしゃべり (G)	.067	.051	.185	.134
〈繁華街型交遊活動〉				
近所/商店街をぶらつく	**	**	.111	.188
ファーストフード	.057	**	.138	.185
カラオケボックス	.046	**	.115	.158
ゲームセンター	**	-.087	**	**
お金の貸し借り	**	-.106	**	.108
物の売り買い	**	-.095	**	**
〈ファミコン遊び〉				
ファミコンをする	**	-.096	**	**
友だちとファミコン	**	**	**	**
ソフトの貸し借り	**	**	.066	**
〈会話活動〉				
TVやマンガの話 (G)	**	**	.079	.120
音楽の話 (G)	.073	**	.144	.164
勉強の話 (G)	.116	.095	.146	.112
異性や好きな人の話 (G)	.142	**	.189	.276
悩みごと (G)	.183	.123	.261	.266
〈友人関係の性質〉				
約束規範	.073	**	.060	.095
約束違反	-.122	-.100	-.153	-.058
嫌なこと	-.089	-.081	-.080	.073
けんか (G)	**	**	**	**
脱G気分 (G)	**	**	**	**

ニケーションにおいて相互にやりとりされるのは、そこで話題となっている恋愛や悩みごとなどの具体的問題だけでなく、相手の信頼性や自分に対する誠意など、相互の関係に関わるものを含んでいると考えられる。また、こうした関係に関わる資質や感情は、話し方や態度、無意識のしぐさなどに表れる傾向があり、そうした振る舞いもまた評価・まなざしの対象となり得る<sup>23)</sup>。例えば、悩みごとを相談する/されるとき、相談する側は相手に対して助言や意見を求めると同時に、親身な態度などに

表れる誠意を期待し、相談される側は相手の悩みごとを聞くと同時に、相手が自分に対して秘密を打ち明けるといった事実によって、自分が信頼されていることを確認したりするといったように、相互に相手の評価やまなざしを意識してコミュニケーションを行い、関係を修正・維持していると考えられる。「異性の話」や「悩みごと」のような秘密の話と「まなざし意識」との相関は、小・中学生が親密な友人関係において、自己の内的資質や感情が評価・まなざされていることを意識し、またそうし

た自己に対する承認・評価を親密な他者に対して期待する傾向があることを示唆している。

第三に、表18～22の結果は友人関係における齟齬や葛藤と「まなざし意識」との関係についても示唆的である。一般に「まなざし意識」は思春期以降に強くなると考えられるが、実際、表17でも確認されるように、「まなざし意識」は小学生より中学生のほうが強い。ところが、「嫌なこと」および「けんか」と「まなざし意識」との相関は中学生より小学生のほうが大きい。これは、「まなざし意識」および友人関係における自己中心性と不安定性が中学生よりも小学生のほうが強いからだと考えられる。自己意識、その要素としての「まなざし意識」は、小学生段階から徐々に発達し顕在化するが、小学生段階では、その相互性への配慮や構えが十分には発達していない。友人関係についても同様で、自己主張（自分の好みやリズムの表出）を相互に調整するという構えが必ずしも育ってはいない。「嫌なこと」や「けんか」と「まなざし意識」との間に正の相関が見られ、しかも、その相関が小学生のほうが大きいのは、そのためと考えられる。

以上のように、小・中学生は、友人関係における連帯や信頼関係を基盤に关系的自己評価を形成・修正する一方で、身近で親密な友だちからのまなざしや評価を意識・志向する傾向がある。また、このようなアイデンティティの再編は、学校で形成された少数で特定の友人関係を基盤としており、それゆえに不安や葛藤は顕在化しやすい傾向がある。次節では、このような小・中学生の友人関係の背景と意味について、学校化社会のゆらぎとの関わりにおいて考察する。（坂口里佳&藤田英典）

## V 考察：学校化社会のゆらぎとグループ化の意味

冒頭でも述べたように、現代の子どもをとりまく生活世界においては、学校の組織構造や活動様式、評価構造が従来通り大きな力を持っている一方で、情報化や消費社会化といった社会・文化的変容が子どもの生活世界に直接影響を及ぼしており、子どもはそれぞれから明示的／暗示的なメッセージを受け取りながら社会化されていく。

このような状況において、子どもたちは学校での小規模で閉鎖的な友人グループに居場所を見出し、そこでの交友に固執するかのように親密性を志向している。このことの意味について考察することは、学校化が極限まで行き着き、かつ情報化や消費社会化が急速に進行する現代社会において、子どもたちの生活世界がどのように構

造化しているかを明らかにしていくうえで大きな意義を持つと思われる。

### A 「防衛」としてのグループ化

まず学校化との関わりでみれば、グループ化は、小・中学生が包摂される学校での諸活動や、直接の社会化エージェントである教師からの働きかけなどに対して、適当な距離を置くためのストラテジーとして機能していると考えられる。

中学生になると特に、学校で日常的に組織される公的な活動に対する関与の度合いは低下し、友人との交友やメディアへの接触に主観的なウエイトは移動する<sup>24)</sup>。しかし今日、彼らが学校の権威を背景とした働きかけに対してあからさまに反抗するということは一般的でない<sup>25)</sup>。反抗的な態度は、しばしば教師や学校による統制の強化を招き、それに対して生徒はさらに反抗するといった「いたちごっこ」となりやすく、これは結果的に反抗という形で学校へのある種の関与を強めることになってしまう。これに代わって一般化しているのは、学校からの働きかけに対して全面的な関与は避け、適当に距離を置いて「かわす」といったかまえてである。そして小規模なグループは、このように学校を「かわす」という関わり方の基盤になっていると考えられる。

学校や教師は基本的に生徒の行動や内面をできるだけ可視化しようとするが、これに対して生徒は不可視な領域を確保して自身をまなざしから防衛しようとする<sup>26)</sup>。しかしこのとき、一人で殻に閉じこもるような方法では、「孤立児」などとして逆に教育的なまなざしの強化を招いてしまう<sup>27)</sup>。明るく快活であること、友人と仲良くすることは日本の学校において特に重視される規範であり、少人数であれそうした「居場所」を確保しているとき、学校や教師の目もいちおうそれを「適応」と見なすことになる。そこでは、とりたてて問題が顕在化しない限り（たとえ生徒自身は問題を意識していたとしても）、積極的な介入はなされない。また同時に、ものごとについての見方やとらえ方が似通っている少人数の仲間とともに、「学校的」なメッセージや働きかけの意味を組み替えて無効化していくことで<sup>28)</sup>、彼らはあからさまな反抗というコストを払うことなく、学校に対して距離を置くことができる。こうした姿勢に対して教師や学校の側は、彼らが生徒に期待するあり方と完全には一致せず、とらえどころのなさを感じることになるが、かといって叱ったり矯正する理由は見つけられないのである。

## B 「居場所」としてのグループ化

次に、子どもたちどうしの中で「グループ化」が持っている意味についてはどうであろうか。

交友は主観的な「好み」や「趣味」の似通った者、感覚的に通じ合える者だけとの間に特化し、仲間集団は小規模化している。このとき仲間集団は、学校生活に意味を与えるほとんど唯一の基盤となっている。学校での公的な役割関係における位置を自分の居場所と感ずることができず、また準拠枠としての一般化された他者や「世間」、普遍的な社会規範の意味が失われつつある現在、リアリティーのある「居場所」としては仲間集団だけが突出する<sup>29)</sup>。そしてそこでは、感覚的に通じ合えるとか、性格が好ましいと思えるとか、秘密を共有して親密になるといったことのみが絆として重みを持つ。先にみた「まなざし意識」はこうした志向性のあらわれである。

一方で、仲間集団のうちに居場所を確保することの重要性は、自己の過剰な主張を抑制することにもつながる。居場所は他者が認めてくれなければ確保できず、そのためには認められるような自己のありようや、認められるような開示の仕方が重要となる。親しい仲間集団の「場」や「状況」に合わせることで、彼らとの摩擦を回避すべく気を使い合うことが友人関係における作法となり、あからさまな自己主張は影を潜める。このような関係のとり方は高度なスキルや配慮を必要とするのみならず、親密な関係を築いているにもかかわらずしばしば内面にストレスを蓄積したり、軋轢を潜在化させるといった皮肉、或いは逆機能がある。

彼らは、比較的自分に似た者、近い者を探し、たとえ「本当に」分かり合える、共感し合える相手でなくとも、とにかくグループに属さなければならないし<sup>30)</sup>、そこでは受け入れられるような自己を、受け入れられるような形で開示し合わなければならない。すなわち、自己というものを確保して仲間に認められつつ、仲間や状況に合わせ、摩擦を回避しなければならないのである。他者に同化してしまえば「自分の」居場所があるとは言えないし、かといって受け入れられないほど離れ過ぎたり摩擦を生んでは一緒にいられなくなるのである。

## C 2つの価値原理の渦中の子ども

以上にみたように、今日学校において子どもは、教師からも周囲の子どもたちからも一人でいることを許されないという状況にあり、従ってグループ化は子どもが学校で生活していくうえでの必然的な対処という意味あいを持っている。では、このことの背景にはどのような社会的状況があるのだろうか。

現代において子どもは、2つの相異なる価値原理が貫く世界の狭間に生きることを余儀なくされている。この2つのエージェントとなっているのは先述した通り、学校という依然大きな力を持つ教育機関と、多種多様な情報を伝える各種メディアや消費・都市空間である。両者の価値原理は、基本的には反対のベクトルを持っている。仮に前者を「学校的」価値原理、後者を「消費的」価値原理と呼ぶとすると、両者は以下のような対比を示す。

「学校的」価値原理 ↔ 「消費的」価値原理

欲求充足の延期	↔	コンサマトリーな欲求充足
集団への帰属	↔	個人の優先
公的役割の優先・公正のための		
平等化・効率のための画一化	↔	個性・差異の尊重
私的欲求の抑制	↔	私的欲求の尊重
論理、理念、規範の重視	↔	感覚、感性、快感の重視
単一で絶対的な価値	↔	多様で相対的な価値

学校はむしろ「学校的」原理が優勢な場所であるが、外部社会で優勢となっている「消費的」原理に包囲され、また浸食されつつある。学校や「学校的」原理が子どもの社会化過程において大きな力を持ち、またそのことが社会的に正統性を獲得していた時代は去り、学校化社会は大きなゆらぎを経験している。そしてここに至って、「個性重視」などの形で学校じたいが「消費的」原理を部分的に取り入れるようになってきているという事実もある。

ここまでに見たように、学校での子どもたちの生活において教師らによる教育的な働きかけ以上に大きな意味を持つ友人とのコミュニケーションにおいては、基本的に「消費的」な原理が優先する。一方、家庭においてはプライベートーションが進行し、消費生活の場という様相を強めているが、同時に子どもを偏差値的な序列をめぐる競争へと動機づけたり、集団的な秩序への同調を迫ったりといった形で、「学校的」な価値原理のエージェントとなっている側面も依然無視できない。

つまり、2つの価値原理は入り組んだ形で子どもに対して伝達されており、彼らはこのように相異なる価値原理によって編成されている2つの世界のまさに狭間に生きている。彼らは「消費的」な価値原理の方により惹かれていることは否めないにしても、「学校的」価値原理を全否定して対抗するわけではない<sup>31)</sup>。いわば彼らは学校において、双方の価値原理に、ここまでに見たようにグループ化などの方法で「折り合い」をつけながら、彼らなりに集団を形成して居場所を確保し、関係性を維持

し、彼らなりの規範や協調性を生成させることによって  
サバイバルを図っているのである。

(伊藤茂樹&藤田英典)

## 注

- 1) 代表的な研究として、スラッシャーやホワイトの研究が挙げられる。Thrasher, F. M., *The Gang; A Study of 1313 Gangs in Chicago*. The University of Chicago Press, 1927. Whyte, W. F., *Street Corner Society; The Social Structure of an Italian Slum*. The University of Chicago Press, 1937. (寺谷弘壬『ストリート・コーナー・ソサイエティ』垣内出版, 1974年) また、日本の代表的な仲間集団の実証研究として、住田(1995)があり、そこでは詳細な「仲間集団」研究のレビューが行われている。
  - 2) ここでは「仲間集団」という用語を「対等な社会的地位にある同世代の他人を成員とする小集団」(『新教育社会学辞典』東洋館出版, 1986年) という広義において用いており、選択の自由度や成員の流動性といった集団の特徴は、その社会的文脈に応じた変数として捉えている。
  - 3) 小中学生の友人関係が学校を主要な形成基盤としていることについては、先行研究によっても指摘されている。例えば、総務庁青少年対策本部『青少年の友人関係—「青少年の友人関係に関する国際比較調査」報告書—(1992年)等』を参照。
  - 4) 子どもの友人関係が学校の組織構造や活動様式・評価構造によって制約されて形成・展開しているという問題についての先行研究には、Epstein, Joyce Levy and Karweit, Nancy, ed. 1983. *Friends in School: Patterns of Selection and Influence in Secondary Schools*. New York: Academic Press. や、Hallinan, Maureen T. & Smith, Stevens S. 1989. "Classroom Characteristics and Student Friendship Cliques." *Social Forces* 67: 4: 898-919. 等がある。
  - 5) アイデンティティ概念の意味内容については、藤田英典(1996)を参照。
  - 6) 坂口(1994)は、青年研究のレビューを通じてアイデンティティ概念の捉え直しを行っている。
  - 7) アイデンティティが志向的側面を持つことについては藤田(1992)を参照。
  - 8) 小・中学生の生活において友人関係が重要な位置を占めていることを端的に示す調査結果(1995年調査)を挙げておく。小・中学生の生活における学校の中心性を示すものとして、「毎日の生活が楽しい」×「学校に行きたくないと思うことがある(不登校気分)」:  $r = -0.403$ , 学校生活における友人関係の重要性を示すものとして、不登校気分×「友だち関係で嫌なことがある」:  $r = 0.303$  (cf. 不登校気分×成績自己評価 :  $r = -0.146$ ), アイデンティティと友人関係の関わりを示すものとして、「自分には良いところがあると思う(長所)」×「友だちに頼りにされていると思う」:  $r = 0.397$  (cf. 長所×成績自己評価 :  $r = 0.249$ )。
  - 9) 調査の目的や内容については、文献として挙げた報告書(藤田編1996)を参照していただければ幸いである。
  - 10) 1995年調査では「あなたがふだん仲よくしている友だちグループは、あなたも入れて何人くらいですか。(2つ以上のグループがある人は、一番仲よくしているグループについて教えてください。)」と尋ね、「2人・3~5人・6~9人・10人以上・きまっていない・とくにいない」の6つの選択肢を用意した。
  - 11) 8割以上がグループに所属しているという結果について、「友人グループ」という尋ね方が影響していると考えられる向きもあるかもしれない。しかし、選択肢として「2人」「はいっていない」という項目も用意した上での結果であるから、この数値をそのまま受け取ってよいと考えられる。
  - 12) 1995年調査に先立って、1989年に不登校問題の研究の一環として実施された「中学生の学校生活調査」(研究代表者・森田洋司)によって、中学生の学級での友人関係が「ミニ・グループ化」していることが指摘されている。「休み時間、あなたはどのように過ごすことが多いですか」という質問に対して、「小人数の親しい人たちだけで、何かをしていることの方が多い」という子どもが最も多くて59.0%、「特に親しい人だけでなく、わりと多くの人と話をしたり遊ぶことの方が多い」という子どもは37.4%、「一人だけですごすことの方が多い」という子どもは3.6%であり、この結果に基づいて「生徒達の仲間関係は、ミニ・グループ化する傾向があり、学級集団は気のあったごく少数の友人の集合体と化し、群れてはいるが集団としての要素を欠いた集合体となってきている(森田1993, p.1074)」ことを指摘している。竹村(1989)も参照。
  - 13) 友人グループがあると答えた子どものうち、「放課後や休日と一緒に遊ぶ」ことが「よくある」という割合は41.4%、「ときどきある」は36.4%、合計77.8%である。
  - 14) 住田は、児童期の子どもの「仲間集団」と「学級集団のなかで形成される子どもの集団」を区別して、後者は、「ある共通の関心を契機として同世代の他人の中から相互に仲間を選択して形成する自然発生的な小集団」としての「仲間集団」ではないと述べている(住田1995 pp.27-29)。しかし、今日両者は多分に重なり合っており、明確に区別できるものではない。むしろ、第1節で述べたように、仲間集団の概念内容は、集団の形成基盤やその社会的文脈によって異なるものであり、小・中学生が生活の大半を学校で過ごす今日、その準拠集団としての機能を果たしているのは学校を形成基盤とする「仲間集団」であると考えられる。
  - 15) 友人グループの規模について検討したデータの調査概要および質問文は以下の通りである。1986, 1988年調査: 東京大学教育学部教育社会学研究室(1993) {1986年12月実施, 東京都品川区内中学校21校2年生2,436名, 1988年12月実施, 東京都江東区内中学校5校2年生1,083名。「問: あなたが現在よくつきあっている友人グループは、あなたも入れて何人で構成されていますか。} 1989年調査: 東京都生活文化局婦人青少年部企画課(1990年) {1989年実施, 東京都, 小学5年生692名, 中学2年生765名。「問: (仲のよいグループがあると答えた人に) 何人ぐらいのグループか。} 1991年調査: 坂戸市登校拒否等調査研究委員会(1992) 1991年1月実施, 坂戸市立中学校8校2年生1,564名。「問: (友人グループが1つ以上あると答えた人に) 一番仲の良いグループの人数は、あなたを入れて何人ですか。} なお、本文中の表に示した1989年調査(東京都)および1991年調査(坂戸市)の数値は、「グループがない」という回答を含めた再計算値である。
- もう一方で、友人グループの小規模化とは一見矛盾するようだが、「親友」の人数は増加する傾向が見られる。NHK世論調査部の行った過去3回の継続調査によれば、「親友」が3人以下の割合は1982年には5割を占めていたが、1987年には46%、1992年には4割に満たなくなっている。他方、親友が10人以上いるという割合は、1982年には15%であったが、1987年には22%、1992年には27%と漸増している。このような「親友」の人数の増加は、実体としての友人数の増加ではなく、「親友」の定義の変化として捉えることができる。すなわち、一般に「親友」とは、多くの友人の中で何人かの心を打ち明けて話せる友(親友/心友)を指すが、近年の小・中学生の場合、少人数で固定的な友人グループと学校でも校外でも行動を共にするために、その関係は親密になる。したがってグループのメンバーは皆「親友」であり、しかもそのグループはクラス替え毎に変わることが多く、「親友」は累積していく傾向があると考えられる。

NHK世論調査部 (1983, 1988, 1993) (第1回1982年, 第2回1987年, 第3回1992年実施, 中学生1,764, 827, 729サンプル。[問: あなたには親友がいますか。])

その他, 友人の人数を調査した研究として, 福武書店教育研究所 (1989)『「モノグラフ・中学生の世界」 vol.32中学生の友だち感覚』, 指定都市教育研究所連盟 (1979)『現代の子どもの意識と行動』, 総理府青少年対策本部 (1989)『少年の生活意識と実態に関する調査』, 内閣総理大臣官房広報室 (1979,1983)『子どもの意識に関する世論調査』, 東京都生活文化局婦人青少年部企画課 (1990)『第5回東京都子ども基本調査報告書「大都市における児童・生徒の生活・価値観に関する調査」』, 東京都保谷市教育委員会 (1980)『昭和55年度保谷市教育調査報告書「児童生徒の校外生活ならびに親の教育意識に関する調査」』, 坂戸市登校拒否等調査研究委員会 (1993)『登校拒否問題の解決に向けて～調査研究報告書～』などがあり, 「親友」と同様, 友人の人数も概して増加する傾向があるようである。

- 16) 住田 (1995) は, 子どもの仲間集団を「活動集団」と「交友集団」の二つに類型化し, 前者は集団的遊戯活動を目的として形成される仲間集団, 後者は親密な子ども同士が相互交渉そのものを目的として形成される仲間集団であるとしている。本稿でもその定義を踏襲してこれらの語を使用している。学校を形成基盤とする友人グループの多くは, 特定の遊戯活動を目的とする「活動集団」というよりも, 休み時間や給食の時間, 登下校などを共に過ごし, 放課後や休日にも連れだって遊ぶといったように, 共同行動や共有すること自体が目的の「交友集団」としての性格が強いと考えられる。
- 17) 交遊活動の形態別分類は, 交遊活動に関する諸項目を因子分析した結果に基づいている。各活動形態の名称は, 事後的に解釈して付けたものである。
- 18) グループに入っていない子や特定の友だちがいない子が, 友人関係における疎外や齟齬の経験が多いという傾向は, いじめと学級集団との関連についてソシオメトリック・テストを用いて考察した竹川 (1993) の議論とも整合的である。その議論では, いじめが発生している学級では「サブグループ化してまとまりやすい少数の者に親密な友人を限定する傾向があるといえ, 学級集団内の友人の結合状態は, サブグループ間で相互排他的となっている (pp.87-92)。」学校からの統制圧力が強くなると学級集団の情緒的雰囲気や硬直化するが, そこへの所属を強制されているので仕方なく少数の親密な者とグループを作り, 疎外感を最小限にとどめようとする。そしてこのサブグループ化が過度に進むと, グループ外の者への敵対意識が強化され, 友人結合の競争に取り残され孤立化した者にそれが集中していじめが発生する, というモデルが想定されている (pp.99-100)。
- 19) 親や教師に対する反抗的態度に関する項目の回答傾向を小・中別に示すと, 「親の言うことに従わない」ことを「とても悪いと思う」割合は, 小学生61%, 中学生36%。また「先生の言う

ことに従わない」ことを「とても悪いと思う」割合は, 小学生66%, 中学生42%, 「先生の言うことをうるさいと感じる」割合(よくある+ときどきある)は, 小学生32%, 中学生57%である。

- 20) これら四つの側面は, 理論的に措定されたものであり, また各質問項目はその理論的枠組みに基づいて, 各要素の指標として用いたものである。なお, それらの項目を因子分析した結果は, 固有値1の基準では一因子しか抽出されなかったが, 4因子抽出基準での結果は表23に示されているように四つの因子に分かれた。アイデンティティの四つの側面についての理論的考察は藤田 (1992,1993) を参照。
- 21) 「肯定的自己評価」および「家族意識」と「関係的自己評価」および「まなざし意識」との関連について触れておくと, 前二者と「関係的自己評価」との相関は, 「肯定的自己評価」が0.456, 「家族意識」が0.307と比較的高く, 他方「まなざし意識」との相関は, 順に0.250, 0.191と, それに比べて小さい。他者との関係における自己評価は, 自尊心や自信, および家族に対する肯定的な意識と深く結びついており, 「まなざし意識」はアイデンティティの他の諸要素とは相対的に独立した構成要素であることが示唆される。なお, 家族意識と自己評価の意識との関わりについては坂口 (1996) が分析している。
- 22) 今日の都市空間は, 人々が匿名な他者のまなざしに向けて個性を演じる舞台として編制され, またそこに集う人々は匿名な他者のまなざしを意識して振る舞う傾向があるという議論については, 吉見 (1987) を参照。
- 23) 外見や振る舞いを人格や感情, 個性の表出とみなす信念の歴史的考察については, R.セネット (訳書1991) を参照。
- 24) 伊藤 (1996) を参照。
- 25) 例えば酒井 (1996) はこのことを高校生のファッションを例にとりて検証している。
- 26) 森田 (1991), pp.85-118。
- 27) また, 後述するようにこれは生徒たちの間でもスティグマ化し, 学校で生きていくことをより困難にする。注7を参照。
- 28) 例えば, 授業において教師が教育的意図をもって行う働きかけを半分茶化したりずらしたりして面白がることで, 外見的には着席して授業に関与していながら, そこを別の場として編成し直すようなあり方。教師が期待する積極的な関与ではないが, 統制されるような逸脱でもなく, 教育的まなざしの一方的な侵入から自己を守ることができる。こうした面白がり方や編成の「コード」は, グループによって微妙に違う「ノリ」のように多様に存在し, これを共有できるのが小規模のグループであると考えられる。
- 29) 「生徒たちは生活上の本能的な知恵にもとづいて, 何年何組という偶然の帰属のただ中で, 潜在的に感知された〈欠如〉を自ら補償するために, 偶然の出会いとその発展ということ (つまり友人関係) に, 自分の位置 (アイデンティティ) 探求のエネ

表23 アイデンティティの構成要素 (因子分析-Varimax回転-)

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
友だちに頼りにされている	.821	.222	.067	.072
よその人に感謝されることがある	.783	.157	.081	.214
何でもやる気になればできる	.124	.865	.064	.149
自分には良いところがある	.408	.643	.162	.080
自分の短所が気になる	-.106	.202	.826	.080
服装や髪型に気を使う	.345	-.019	.718	.045
親を困らせないようにする	.088	.199	-.094	.790
家族や親戚に誇りに思う人がいる	.169	.013	.251	.745

ルギーの最大量を注がざるをえない。かれらは、ひとつの空間で大部分の時間極度に身体活動の少ない状態を強制され、しかもその帰属の意味について納得できる理由をつけてもらえない。そのことに具体的な不満を抱くというのではなく、自分たちのそうした状況そのものから、自分たち自身の帰属の意味をまがりなりにも作りあげなくてはならないということである。小浜 (1985), pp.145-146。

- 30) 「わかる人」や「合う人」に認められること、及びこのように少数のグループ内で「認められている」ということをその他大勢に認められることはきわめて重要であり、それが無い場合、彼(女)は、誰にも相手にされない、取るに足りない者と見なされることになる。これは学校で社会的に生きていけなくなることを意味し、絶対に避けなければならない事態である。こうしたことについての指摘は数多いが、例えば次のような養護教諭の発言がある。「授業によって教室を移動することがありますよね。そのときに、一人でいると、暗い、のろま、とか言われて、いちばん嫌われるようです。とにかく、群れにきちっとするために、まずペアになっていることが最優先なんです。信じられないと思いますが、教室移動のときに、廊下を一人で歩いているだけで、『あの子、友達がない』と非難されてしまうんですから」。東京私立学校保健研究会, 1994, pp.108-109。
- 31) 「学校的」価値原理にむしろ親和的であるような子どもも存在するというもののみならず、親密性を志向して形成された仲間集団において、学校以上に学校的でタイトな規範や集団性が形成されるといったこともある。また、先輩-後輩間の非常に厳しい規範は、生徒たちの間に「自主的」に形成されることが多い。

また、子どもがこのように相異なる価値原理の狭間に生きていることを指摘したのとして山下 (1991) がある。しかしここでは、子どもを「消費的」価値原理にのみコミットするものと一元的にとらえ、子どもがそれを持ち込むのを阻止しようとする学校との対立関係のみをみているが、状況はそのように単純ではないはずである。

一方、岩見 (1995) は子どもが生きる「学校文化」と「消費文化」の相克を指摘し、これらと生徒のアイデンティティとの関わりを考えようとする点で本研究の関心に近い。岩見は、学校文化が指示する「生徒アイデンティティ」を受容できない者が消費文化にコミットすることで自己を支えようとするのみで、これは逸脱的な生徒文化の説明に用いられてきた「地位欲求不満説」に近い解釈(仮説)である。消費文化にコミットする／しないというのは、岩見も言うようにあくまでアイデンティティの問題であり、成績の良し悪しや、表面上学校生活に適應しているかどうかといったことが自動的にコミットのあり方を決定するわけではないと思われる。双方の価値原理へのコミットの度合いや仕方の関係や、そこでのアイデンティティのありようを、個人或いはグループという単位で明らかにすることが我々にとっても次の課題である。

## 文献

- 藤田英典 1992「個性化時代のアイロニー」『MIND TODAY』11月号, 金子書房  
 ——— 1993「新しい学校観をさぐる」『月刊学校教育相談』8月号, 学事出版  
 ——— 1996「共生空間としての学校」佐伯他編『シリーズ学びと文化6 学び合う共同体』東京大学出版会  
 ——— 編 1993『中学生・高校生の生活と意識～1980年代後半の調査より～』東京大学教育学部教育社会学研究室  
 ——— 編 1996『子どもたちの生活世界—「小・中学生の生活と

- 意識についての調査」報告書』伊藤忠記念財団  
 伊藤茂樹 1996「子どもにとっての学校とメディア」藤田英典編 (1996)  
 岩見和彦 1995「学校文化と消費文化の相克」『季刊 子ども学』9号  
 小浜逸郎 1985『学校の現象学のために』大和書房  
 森田洋司 1991『「不登校」現象の社会学』学文社  
 ——— 1993「私事化社会におけるプライベート・スペースの再構築にむけて」『人文研究 大阪市立大学文学部紀要』第45巻第11分冊  
 ——— 編 1989『「不登校」問題に関する社会学的研究』大阪市立大学文学部社会学研究室  
 ———・松浦善満編 1991『教室からみた不登校』東洋館出版社  
 NHK世論調査部 1982,1987,1992『現代中学生・高校生の生活と意識』  
 坂口里佳 1994「現代青年論再考」『東京大学教育学部紀要』第34巻  
 ——— 1996「子どもの自己意識と人間関係」藤田英典編 (1996)  
 酒井朗 1996「社会の変化と現代高校生」『月刊高校教育』10月号  
 Sennett,R. 1974『公共性の喪失』北山克彦・高階悟訳, 1991, みすず書房  
 住田正樹 1995『子どもの仲間集団の研究』九州大学出版会  
 竹川郁雄 1993『いじめと不登校の社会学』法律文化社  
 竹村一夫 1989「プライベートゼーションの進行と『不登校』問題」森田編 (1989), 第8章  
 東京私立学校保健研究会 1994「インタビュー〈癒しの場〉としての保健室」『季刊 子ども学』4号  
 山下英三郎 1991「学校と子ども—消費をめぐる攻防」芹沢俊介編『消費資本主義論』新曜社  
 吉見俊哉 1987『都市のドラマトールギー』弘文堂

## 付記

「小・中学生の生活と意識に関する調査」は、伊藤忠記念財団の助成を受けて実施されたものである。記して感謝の意を表したい。また、調査対象校ならびに調査にご協力いただいた諸先生方、共同研究者である武内清先生(上智大学教授)をはじめ青少年文化研究会のメンバー諸氏に感謝したい。